

# 『夜明けまでバス停で』

監督：高橋伴明

脚本：梶原阿貴

出演：板谷由夏／大西礼芳／三浦貴大／松浦祐也／ルビーモレノ／  
柄本佑／下元史朗／筒井真理子／根岸季衣／柄本明

2022年／日本／91分



予告

映像配信サービスで配信中  
©2022 「夜明けまでバス停で」製作委員会

## 社会を旅する シネマ

きつと もっと 近くなる  
きつと もっと 知りたくなる

三知子はアクセサリー作家として活動しつつ、生計を立てるために居酒屋で組み込みのバイトとして働く40代女性。バイト先の後輩たちがセクハラや差別的な発言をしていたらはっきりと注意する。元夫の借金も自分が選んでしまった男だから仕方ないと返済し続ける。認知症の母の介護費用を兄に求められたら自分も余裕がないのに送金する。そんな真面目で正義感が強い性格だ。

しかし、職場のマネージャーからすると目の上のこぶだった。オーナーの息子が次期社長とも言われるマネージャーは、傍若無人でセクハラやパワハラは日常茶飯事。売上低迷時でさえ不正な接待会計を横行させていた。そうした行動を三知子は「黙って見過ごす」ことができないからだ。

そこへ降りかかるコロナ禍。緊急事態宣言で休業を余儀なくされたとき、真っ先に解雇されたひとりが三知子だった。マネージャーは「扱いつらいし自業自得だ」と。会社の寮に住んでいた三知子は仕事だけでなく住む場所も失うことになる。

大きなスーツケースに荷物をまとめた三知子は、インターネットカフェに向かうもこちらも休業中。街を歩き回った末、三知子が決めた寝床はバス停のベンチだった。最終便から始発までの夜中の時間、小さな灯りが差すその場所でスーツケースに寄りかかりながら眠りにつくのが三知子の毎日となった。

そう。本作は2020年11月に渋谷区のバス停で路上生活をしていた女性が殺害された事件に着想を得

## バス停で眠らねばならない その前にできたことは

アーヤ藍

ている。ただ、被害者女性の実話を描いているわけではない。非正規雇用で働く女性たちをはじめ「一歩違えば、自分も同じ道を歩んでいたかもしれない」と感じさせるひとりの女性の物語だ。

公園のトイレで歯を磨き、コインランドリーで洗濯するなどして、一見ホームレス状態にあることを気づかれなかった三知子も、コロナ禍が長引き仕事も見つからずに困窮を極めていくと、飲食店のごみ箱を漁ってしまうほどに。彼女の窮状に気づいた、いわば「ホームレスの先輩」が炊き出しに三知子を連れて行くも、三知子は列に並ばない。折しも菅元首相はテレビで「自助、共助、公助が、私が理想とする社会だ」と語っていた。三知子は「自助」の責任感が強すぎて、外に助けを求めることができないのだ。そんな彼女もある出会いを機に、不条理な社会に対して「怒る」ことを思い出ししていく……。

語弊を恐れずに言えば、本作の最後を私は好きになれなかった。だがどんな最後が見たかったかと言われると悩む。コロナ禍で暮らしを失ったままの人もいれば、「社会の底」に落ちてしまいやすい人も今も数多くいる。明るい最後は空虚。かといって暗い最後は絶望しかない。そもそも大事なものは、この「最後」に至るより前の段階で、違う道をつくっていくことなのだろう。いざというとき助けを求めやすい社会を。女性の労働環境や経済状況の改善を。その先に「私が見たいエンディング」があると思う。



アーヤあい：映画探検家。1990年生。慶應義塾大学卒。在学中に訪れたシリアが帰国直後に内戦状態になったことをきっかけに、社会問題をテーマにした映画の配給宣伝を行うユニテッドピープル(株)に入社。同社取締役副社長も務める。2018年独立、映画イベントの企画運営や記事執筆等を行う。

